

お前を初めて見たのは、戦場だった。

白銀の鎧をまとい、男たちの中で剣を振るっていた。乱戦の中でも誰よりも強く。どれだけ消耗しても、その目だけは死んでいなかった。

その姿を一目見た瞬間に、俺の中では決まっていた。

理由なんて後付けだ。ただ——あの女を手に入れると。

何度も相対した。殺そうと思えばいつでもそうできる力が俺にはあった。

でも——俺が欲しかったのは、あの光ごと、全部、だ。

だから、勝利を手にし、欲望のままに、全部を俺のものにした。

——いつもなら、それで、終わりのはずだった。

あれから、どのくらい時間が経っただろう。

ガルディアスの陣幕で過ごす日々は、思っていたよりも穏やかだった。毎晩抱かれる。それは変わらない。でも、最初の夜のような激しさとは少し違う。じつくりと、丁寧に。どこを触れば感じるか、どこを責めれば気持ちいいか、全部分かっている手つきで——私の身体を、少しずつ手懷けていくみたい。

すぐに飽きて殺されるのだろうかと思っていた私にとっては、こんな毎日には予想外のことだった。

朝、目覚めると、隣にガルディアスの温もりがある。それを当たり前のよう感じ始めている自分がいる。

——それが、ひどく恐ろしい。

ある夜、なかなか眠れない日があった。

寝台の端に座って、揺れる蠟燭の灯りをぼんやりと眺めていた。ガルディアスは隣で眠っている。規則正しい寝息が、静かに聞こえていた。

（……私は、何をしているんだ）

敵将の陣幕で、敵将の寝台で、敵将の隣で眠っている。それが今の私の現実だ。

なのに——嫌悪が湧いてこない。

最初はあるなに憎かったのに。この男を殺してやると思っていたのに。今は、その寝息を聞きながら、妙に落ち着いている自分がいる。

（なぜだ……）

寝首を掻こうという気さえ起こらなくなっていた。

考えようとして、答えが出なくて、その繰り返しだった。

騎士として生きてきた。ずっと——騎士団長の娘として、生まれた時からそう生きると定まっていた。女だから舐められる。女だから証明し続けなければならない。弱音を吐けば「やっぱり女は」と言われる。だから感情を殺した。人前で鎧を脱ぐことさえ恐ろしかった。

なのに——ガルディアスに鎧を奪われ、あれほど忌避していた「女」にさせられた。

最初から、この男は私を「騎士」としてなど見ていなかった。白銀の騎士でも、国一番の女剣士でもなく——ただの、一人の女として扱う。それが屈辱だと思っていた。誇りを踏みにじられていると思っていた。

でも——

(……息が……できる……)

証明しなくていい。強がらなくていい。この男の前では、ただの女でいられる。

その事実とうっすらと気が付き始め、いつの間にか——女でいることに慣れてしまっていた。

——そんなこと、生まれてこの方、望んだことさえなかったのに。蝋燭の灯りが、ゆらりと揺れた。

（私は……騎士でなくなったら、何になるんだ）

答えは出なかった。ただ、その問いだけが胸の中で重くなっていく。夜が白み始めるまで——私は一人で、その問いと向き合い続けた。

その日、ガルディアスは陣を離れていた。

近隣の砦に視察に行くと言っていた。夜には戻ると。

一人になった陣幕の中で、私はまた考えていた。昨夜と同じ問いを、

答えの出ないまま、ぐるぐると。

（……ガルディアスは、無事に帰ってくるのだろうか）

その考えが頭をよぎった瞬間、はっとした。

（待っているのか……？ 私が……あの男の帰りを……？）

私は、今やあの男の慰み者だ。帰ってくればまた好きなように抱かれるだけ。なのに——あの男が私を欲望のままに抱き潰す夜を思い出すと、それだけで、身体の奥がじわりと温かくなった。

頭を振って、その感覚を追い払おうとした。けれど、追い払えない自分に気づいて、また自己嫌悪に陥る。その繰り返しだった。

——異変が起きたのは、日が暮れてからだだった。陣幕の入り口が、乱暴に開かれた。

「——隊長」

その声に、心臓が跳ね上がった。

「レオン……!?!」

レオンが、そこに立っていた。幼い頃から共に訓練した、信頼できる部下。懐かしい顔に、思わず安堵しそうになったが、すぐに何かがおかしいということに気が付いた。

『待て……っ! 隊長……っ! 俺が……隊長を……っ!』

——あの日と、同じだ。

私がガルディアスに抱かれるのを見て、股間を勃起させていた、あの時と。いや、あの日よりもっと——暗く、ギラギラとした光を湛えている。忠誠心の目じゃない。獣が獲物を見るような目だ。

「どうして。お前、逃げ延びたんじゃ……?」

あの数日後、捕らわれていたレオンが逃亡したとガルディアスから聞かされていた。

「……戻ってきました」

レオンが、一步踏み出した。その足取りは確かなのに、目だけがどこか虚ろで。

「隊長を、迎えに」

「レオン？」

「ずっと考えてました」

また一步、近づいてくる。私は無意識に、一步後ずさった。

（なぜ……私はレオンから逃げようとしている……？）

「あの日から、ずっと。隊長のことだけ、考えてました。隊長が犯されてる姿が、頭から離れないんです。夜も眠れない。目を閉じると、隊長の顔が浮かぶ。あの男に抱かれて、遊女みたいに喘いでる隊長の顔が」  
「レオン、落ち着け」

私の声は、震えていた。目の前にいるのは、本当にレオンなのか。私の知っているレオンは、もっと穏やかで、優しく、礼儀正しい青年だ



った。それが、今は、欲望を丸出しにして、こちらに手を伸ばしている。  
「落ち着ける訳ないでしょう！？ 隊長が他の男に抱かれてるのに、落ち着いてなど……！」

「お前……」

「俺だって……俺だって、ずっと隊長のことをお慕いしていました！」  
レオンが叫んだ。その目から、涙が溢れていた。気付いていたのに、ずっと知らないふりをしてきたレオンの想いを聞かされて、息が止まった。

「ずっとあなたの側にいて、ずっと想っていました。でも、それ以上は望まなかった。主従だから。隊長に俺なんかはふさわしくないって、分かったから」

「レオン……」

「なのに、あの男に……！ 俺が何年も我慢してたのに、あんな、敵将

のクソ野郎に……！」

レオンの手が、私の肩を掴んだ。その力は、痛いほど強かった。

「……許せるわけがないでしょう？」

その目には危うい狂気を孕んでいる。

「今日、あの男はいない……手薄だったおかげで見張りは全て片付けました」

「片付けた……！？」

サッと血の気が引いた。レオンは私の部下の中でも一番剣の腕が立つ。

「隊長。俺のものになってください」

「レオン……？」

「確かに隊長の処女はあの男に奪われたかもしれませんが……でも、俺はそんなことにしません。無理やりだったんですよね？あの時だって、ほんとは嫌だったんですよね？隊長が俺を選んでくれるなら——」

レオンが勢いよく襲いかかってきて、身体を押し倒された。

「——っ！」

寝台に背中がぶつかる。衝撃で息が詰まった。レオンが、覆いかぶさってくる。咄嗟にあたりを見回すが、武器になりそうなものは何もなかった。

「やめろ！レオン、正気に戻れ！」

「俺は……いつだって正気です」

レオンの手が、私の寝間着の襟元を掴んだ。その目は、正気じゃなかった。

「あの日からずっと、これだけを考えてた。隊長を、俺のものにすることだけを」

ビリッ、と布が裂ける音がした。冷たい空気が、肌に触れる。

「やめろ！」

「隊長……隊長……」

レオンが、私の、曝け出された胸に顔を埋めた。その息遣いは荒く、熱く、飢えた獣のようだった。抵抗しようと頭を押さえつけても、ビクともしない。武器がなければ、男の力には敵わない。

「ずっと……ずっと、こうしたかった」

ふいに乳首を、口に含まれた。

「んっ……！」

歯が当たって痛い。乱暴に吸われて、快感より痛みの方が大きい。

「痛い！ レオン、やめろ！」

「ああ。隊長の胸……ずっとこうしてしゃぶりついたかった」

もはやレオンは私の言葉を、聞いていない。自分の欲望だけで動いている。

（痛い。痛いだけだ）

デユ、デユと、きつく吸われると、余計に痛みが増す。

ガルディアスは、こんな風に触らなかった。絶妙な力加減で、私の反応を見ながら——そこまで考えて、私ははっとする。

(……なんで今、あの男のことを考えて……?)

私は思考を振り払うように、レオンに語りかける。

「レオン……もうやめてくれ。痛いと言っている。聞こえているか」

「はあ……はあ……隊長……隊長のおっぱい……隊長の……っ」

レオンは、恍惚とした顔で私の乳首を乱暴に吸い続けている。

「——隊長、俺を受け入れて下さい」

ずっと、レオンの手が私の太ももを撫であげる。

「……な、やめっ」

レオンの指が、濡れてもいないのに、無理やりおまんこの中に押し込まれた。

「——っ！」

声にならない悲鳴が漏れた。乾いたそこを太い指で乱暴にこじ開けられて、中が裂けそうに痛かった。

「隊長の中……きつい……」

「濡れてないのに……当たり前だろう……！」

「隊長のおまんこ……はぁ……はぁ……俺の指ですぐに善くしてあげますから」

グチュグチュと指を無造作に動かしているが、ただただ痛いだけで、ガルディアスにされている時のような気持ちよさは一切なかった。

あの男はいつも必ず不必要なくらいに執拗に愛撫し、十分に濡らしてから挿入していた。どこが弱いか、どう触れば感じるか、全部分かっているみたい。

（なんで……敵のくせに……）

こんな時にさえ、また、自分がガルディアスのことを考えていると気が付いて、私は思わず笑ってしまった。

——一番信頼していた部下に襲われているというのに。

「ここ……ここですか、隊長……！」

レオンの指が、奥を突いた。でも、違う。そこじゃない。

「違う……」

「え……？　なんです、隊長？」

言いかけて、はっとした。

（……何を言ってるんだ、私は）

「違う……？　分かんない……どこ……」

そう言って、レオンが焦ったように指を動かす。でも、がむしやらに動かされても、痛みばかりが増していく。

「もういい。やめてくれ」

「やめない。隊長を、気持ちよくしたい」

「気持ちよくない。痛いだけだ」

「嘘だ。あの男にされた時は……あんなに感じてたのに……！」  
レオンの目が、暗く光った。

「あの男にできて、俺にできないわけない……！」  
指が抜かれた。代わりに——レオンが、ズボンを下ろした。

（嘘……入れる気か……！）

恐怖で、身体が強張った。

「待て。レオン、落ち着け——」

「うるさいうるさいうるさい……！」

硬くなったものが、入り口に押し当てられた。熱くて、硬くて——それが今は恐ろしい。

「お願いだ、レオン。正気に戻ってくれ……！」



「大丈夫ですから……はあ……はあ……俺ので……いっぱい気持ちよくしてあげますから……♡」

——ミチッ。

「……くくッッッ!!」

全く慣れていないのに、無理やり中にめり込まれた。裂けるような痛みが、下腹部を襲う。

(痛い……裂ける……!!!)

生理的な涙が溢れ出てきて、止まらなくなった。

「痛い！抜いてくれ……!」

「隊長の中……あったかい♡」

レオンは、恍惚とした顔で腰を動かし始めた。私の涙なんて、まるで見えていない。

「やめろ……痛いから……!話を聞いてくれ」

どんなに懇願しても、私の声はレオンには届かない。

パンッ♡パンッ♡パンッ♡

「はあ……♡隊長……隊長……♡」

壊れたように、繰り返し呼びながら、腰を振っている。自分の気持ちよさだけを追いかけているみたいに、奥を突いてくる。

「んっ……あっ……」

声が漏れた。

（――え）

痛いだけのはずなのに。何度も出し入れされているうちに、少しずつ――身体が、反応し始めていた。

（やだ……）

クチュ……クチュ……と少しずつ濡れてきている。さっきまで全然濡れなかったのに。

ヌチャツ……ヌチュツ……♡

水音が、聞こえ始めた。

（嘘……なんで……）

自分の身体が、信じられなかった。こんな乱暴な行為で、どうして濡れるのか。けれど、濡れてきたおかげで、痛みはずいぶんマシになった。

「隊長が……はあ……はあ……俺のちんぽで……♡」

レオンが、嬉しそうに言った。

「やっと……隊長も気持ちよくなってきたんですね♡」

「違う……違う……!」

違う。感じたくない。レオンので、感じたくない。でも、身体が勝手に反応して――

（ガルディアスに何度も抱かれて……身体が、男を受け入れることを覚

えてしまった……?)

そう考えが至り、悔しかった。ガルディアスに調教されてしまった身体が、心の拒絶とは裏腹にレオンにも反応してしまっている。

「あっ……♡んっ……♡」

奥を突かれるたびに、声が漏れ出てしまう。止められない。

パンパンパン♡♡

「隊長……もっと、声、聞きたい……！」

「んっ、ん、や、やめっ、んっ……♡♡♡」

「可愛い……隊長……はぁ……好き……もっと……もっと……♡」

「んう……♡や、やだ、やめ♡んんっ……♡」

レオンの腰の動きに合わせて、声が出る。グチュグチュッと、水音も聞こえる。

なのに――

「違う……」

思わず、呟いていた。

「え……？」

「——お前じゃない……」

身体が反応しているのに、満たされない。ガルディアスの時みたいに、頭が真っ白になるような快感には繋がらない。ただ、犯されていることに身体が反応しているだけ。

レオンでは——身体は濡れても、心は満たされない。

「なんで……！？あの男にはすぐに何度もイッてたのに……！」

レオンが、焦ったように腰を速めた。

パンパンパンパンツ♡♡

「んっ、んっ、んんっ♡」

（ガルディアス……！！）

心の中で、無意識にガルディアスの名前を呼んでいた。敵将の名前を。私を囚えた男の名前を。

(……あの男に……私は……)

「ね？ちゃんと気持ちいいでしょう？隊長……！隊長……っ！」  
ズチュズチュズチュズチュツツ♡♡♡

狂ったように奥を突き上げられて、思わず私は叫んだ。

「……っ、ガルディアス………！」

「——っ」

レオンの動きが、一瞬止まった。

「今………なんて………」

「………っ」

しまった、と思った。でも、もう遅い。

「あの男の名前を呼んだのか………!!？」